

映画 カンタ

ティモール

@ ITC しみよた

Canta! Timor 上映会がありました

2016
2.28

東ティモール独立までの苦しい日々を振り返りながらも、人の過ち、喜び、絆、すべてを歌で表す人々の姿が勇気を与えてくれます。今回観られなかった方も、次の機会にはぜひ！

日本はどうする？

日本の南約5千キロに位置する東ティモール共和国。映画に映る小さな島国は、美しい自然と歌と、人々の笑顔であふれていました。でもここは、2002年の独立まで27年間、インドネシア軍による武力支配のもと日常的な殺戮が行われていた場所。人口の約3分の1の命が奪われ、生き延びた人々も家族や友人を失いました。

2002年なんて、ついこの間のことです。私は大学に入学したばかりで、新しい友だちとの付き合いや、海外留学や、アルバイトのシフトなんかで頭が一杯だった気がします。信じられないけれど、これだけのことをしたインドネシアを、主に油田をめぐる利害関係から、一部の国は長期にわたり支持・支援し続けました。日本もそのひとつ。そして私も「生きているだけで資源を大量消費する」生活をしてきた自覚があります。日本政府だけではなく、私自身の人生もこの人たちの生活を動かしてきたのは間違いない。無関心だったことを、悔しく、恥ずかしく、申し訳なく思いながら、当時の映像を目に焼き付けました。

いまの私だって、気づけば自分の日常で、やっぱり頭がいっぱいになってしまいます。でも日本国内にだっていまでも、沖縄で戦う人たちや、仮設住宅に住む人たちがいる。目の前にあるモノやゴミも、魔法でできたり消えたりしているわけでは

なくて、作り、処分する人たちがいる。自分の生活に「実害がない」と、「関係がない」ととは、イコールではないんだと、改めて実感しました。だからこそ、日常の裏側に思いを馳せ、生活を少し変える積み重ねが世界を変える——というのは、きれいごとではなく、やはり真実なのではないか思います。

スクリーンの中の東ティモールの人々は、怒りよりも、独立を成し、いま平和であることに對する喜びと感謝、彼らを守り続ける自然の精霊「ルリック」への敬愛の念をずっと強く抱いていました。それらをこらえきれない悲しみとともに歌にして、大声で、体中で表しているようでした。彼らの歌声に指先が震えたのは、私だけではなかったはず。自分の中にある、平和と、自然と、支え合って生きることへの愛情が呼び起こされた感覚でした。この愛情は、私の心の中でどうやって育ってきたのか。東ティモールのような、信仰も、歌も、「ルリック」も身近にない自分は、どうやってこの心を、子どもたちに伝えていけばいいのか。この映画を観てからずっと考えているけれど、答えは一人一人違っていい気がします。日本は、私たちはどうするのか、改めて考えるきっかけをくれる映画。世に送り出してくださった方々、上映してくださった方々、ありがとうございました。

wio